

事例

3

2010年11月

墓前でのとまらない涙



大阪から滋賀県へ移住した。退職後は大都会の雑踏から離れ、自然豊かな田舎でのんびり過ごしたい。そんな夫婦の長年の夢が実現したのだった。しかし、しばらくして悲劇が訪れた。夫が脳梗塞で倒れたのだ。要介護2と認定され、闘病生活が始まった。夢にまで見た田舎生活のその始まりは、妻にとっては、その後長く続いていく夫への介護生活の始まりでもあった。

交通の便が発達していない地方では、何をするにも不便を感じる。始めのうち、お墓参りや旅行などは息子が手伝ってくれた。しかし、息子が年齢を重ねるにつれ、仕事の都合もあ

り、なかなか頼めなくなってきた。夫婦二人で毎年欠かさなかったお墓参りも、いつの間に行けなくなっていた。自宅からお墓のある場所までは、車で200km。電車を乗り継いでも5時間はかかる。妻一人で夫を連れて行くにはあまりにも遠すぎる距離。途方に暮れていた。そんな中、神戸にある「しゃらく旅倶楽部」の存在を知った。神戸まで行ければ、お墓参りにも行けるかもしれない。ケアマネジャーに相談し、すぐにしゃらくに連絡を入れてもらった。

ご夫婦のご自宅までは電車でおよそ2時間。「まさかこんな所まで来てもらえるなんて

…。」それが、私たちしゃらく旅倶楽部が頂いた最初の言葉だった。「お墓参りに行きたいんです！」「トイレによく行くんです！」「蟹が食べたいんです！」「寝る時は、ご飯食べる時は…」行きたいという気持ち以上に、旅に対する不安の方が多いのだということが分かる。一つひとつ、私たちにできる対応をお伝えすると、強張った顔が少しずつ和らいでいく。続けて墓地周辺や宿泊先のバリアフリー状況を説明し、墓前で手を合わせることが出来ることを伝えと、「不安」から旅に行けるという「想い」の方が大きくなった。

出発当日、目的地までは車で約3時間。途中、ご夫婦にとっての懐かしい道に入った。遠い過去なのか近い過去なのか、噴水のように思い出が溢れ出てきた。お墓に到着すると、普段は手すりに掴まって何とか歩けるお客様が、いくつかの段差を乗り越え、一歩いっぽ、ゆっくりと自らの足で墓前に向かう。花を手向け、線香をたく。そして、手を合わせたその瞬間だった。大粒の涙が頬をつたい、お墓に抱きつくように泣き崩れた。

不自由でなければ、いつでも行けるお墓参り。病気で倒れたその時、突如としてお墓参りが遠い存在となったのだろう。お客様の涙を見ていて、私はそう感じた。

🔍 担当者からのコメント

お墓の前での涙、お姉様と面会した時の涙、そして最後に、「また行きましょうね」と申し上げた時の涙が、印象深い旅行でした。旅をあきらめないをコンセプトに実施する私達にとって、いただいた涙と笑顔は大きな原動力になります。涙と笑顔の旅行、また行きましょう。

1 日目

時間	行程
8:45	介護タクシーがご自宅にお出迎え
9:00	ご自宅を出発
12:00	昼食
15:00	墓地にご到着、妹様合流 お墓参り 墓地を出発
15:30	浜坂温泉保養荘に到着
16:30	入浴
18:30	食事 就寝

2 日目

時間	行程
	起床 朝食
10:00	浜坂温泉保養荘を出発 途中妹様が下車 昼食場所に到着
12:00	昼食
13:00	昼食場所を出発
15:30	ご自宅にご到着
15:45	エスコートヘルパーが帰ります

📌 その他のメモ

介護度 要介護4

年齢 81歳

出発地 滋賀県高島市

行先 兵庫県浜坂

同行 エスコートヘルパー1名

